



と、印南より送つたる結納の金子宙にて挿むおのが欲心、無理押しに嵩にかかつて罵しりける。律氣の弥作氣もおろく、

「イヤく申し、弟めはなかく金銀に目のくれるやうな奴ぢやござりませぬ。何のお前様少々の事なら押し付けても得心させます。があれにも尤もなやうすがござりますゆえ、それで私も是非なうお断りを」

「ウン待てく弥作、弟に尤もなやうすあるとは、ソリヤ、いかがの仔細ぢや。サまづその仔細を語れ」

「ハイその仔細と申しますは、どうも、人に申されませぬ事でござります」

「イヤサ人に申されぬ事でも身どもに語らねば仔細が知れぬぞよ、サアその訳語れ」

「ハイ」

「何とぢや」

「ハイ」

「エ、どうぢやいやい」

「サアどうも、この事ばかりはお許しなされて下さりませく」

「ム、スリヤやうすがあると云うも偽りぢやな」

「イエく申しなかく偽りでは」

「エ、置きおらう、こな土ほぜりめが。ウヌもうよい、もう頼まぬ。日頃正直なその方と思ひ由ない事を約諾せしは某が僥勿だ。今更誰をか恨みんといつてこの七太夫印南に対し虚言者になった、オ、武士道が廃つたはやい。その云訳にはこの所にて切腹致す」

と諸肌くつろげくと、心に浮かまぬ死用意

「サア今これにて切腹するは、印南へに云訳とその方への面当てだ、

必ず止めるな、今切るぞ、止めるなく今切るぞ今切るく。ガコリヤ弥作、そぢやマ胴慾な者ぢやぞよ。恩と云う事知っているか、五年以前の水牢は誰の影で助かった、女夫安閑と暮らしてゐるは皆身どもが影ぢやよ。わりや忘れたな、サア今その方が了簡一つで七太夫を生かさうと殺さうと、有無の返答次第ぢやぞよ」

と、恩を重しに云ひまわされ、身を裂かるるより切なき思ひ  
「いつそやうすを云はうかイヤ、弟に他言せじとの契約立たず」

何とせんかた涙より、他に返事はなかりける。

「ム、返答のないは不得心ぢやな。もう是非に及ばぬ」

とおどしの刀抜けば、弥作取り付き

「マアくく待って下さりませ」

「イヤく放せ、切腹致す」

「サアくくやうす申しますく、マアくお待ちなされて、ハテお待ちなされて下さりませいな」

と、おろく涙に縋り付く。じろりと見やり

「ム、仔細語るか」

「ハイ申しますく」

「サ、よいはい、やうす申すとあるにア、たつて切腹するでもないかい。シテそのやうすは、ナ何とだ」

「ハイこれはモどうも親兄弟の仲でもめつたに云はれぬ事なれど、大恩あるあなた様が養子の約束ならずばそこで腹切るとまでおっしゃるゆゑ、是非なう申します。が申し必ず人におっしゃつて下さりませなえ」

と、あたり見廻し膝すり寄せ「モ御存じの通り、弟は浅野の家来、去年の騒動にて一家中は皆散々、中にも大石殿を頭として四十余人の諸士が

上野を討つ企て。弟めもその中へ加はり今晚皆江戸おもてへ出立との物語。侍の道が立つ事さうにござりますれば、ここの所を聞き分けて下さりませ」

と手を突いて、弟思ひに大望を、むざと語るぞ是非もなき。  
七太夫吐息つき、

「さて／＼思ひよらざる珍事を聞くはい。スリヤ大石が放埒も計略であつたよな。ヤ誰しも武士はあるべき事だ。数多ある家中は離散し、僅かに残る四十余人亡君の仇を討たんとは、ハア、あつぱれやあつぱれ、その仔細を聞く上はいかにも七太夫承知致した、とサ云つてはこつちの工面がア、イヤ弥作、さほど義心の萱野和助南へ仲立ちするはサこの観の大慶、他門の外聞、弥作いよ／＼弟は貰つたぞよ」

「ア、イヤ申し、ソリヤ、お前様御無理と申すもの」

「何が無理だ／＼。弥作よくものを合点致せ。その敵と付けねらう上野殿は高家の職だはい。首尾よく本意をたつした所が四十余人は皆逆さ磔、ことによつては一家一門兄弟ならばその方までどういふ咎めに合うも知れず、現在一人の弟を見殺しに致さうより、瀬左衛門殿へ遣わせば一生楽々暮さるといふものだが、それともたつて不承知なればソリヤ身どもは切腹」

「ア、申し／＼、そないな短気な事」

「サ、／＼止めるは弟に得心さすか」

「じやてお前様」

「しからば切腹」

「サアそれは」

「得心いたすかサア／＼／＼」

と決め往生、徳利片手に女房が、戻りかゝつて家の体、見るにびっくり分け隔て

「マア／＼待つてくださりませ。こりやマアどうした事で弥作殿を」

「ヤア女の知つた事でない。すつこんでゐをろうサア弥作返答致せ何とだ何とだ」

「ハイそないにおつしやる事なれば、弟が帰り待つて今一応勧めてみませうが、あなたがこれにおいでなされてはどうもそこがヤこう致しませぬ。どうぞ暫くお引取りくださりませ。否やの返事を暮六つまでに」

「ム、きつと返答致すか。ア最早八つ過ぎ、暮までは間もなし。返答延引に及ばばこの方より仕掛け、和助と対談、ことによつては武士と武士との論に及び打ち果たさうも知れぬぞよ。エイサ、／＼、そこを無難に納めるはそち達が働きた。性根を据多て返答せよ」

と、おどしの詞鋭くも欲の態、鷹雛鳥を引掴んだる兼ねての工み無になす事かと、門の口歩み／＼も一思案、

「今聞いたるやうすでは義を固めたる和助が魂、なか／＼変ずる所存もなし。もし彼が承知せずばまんまと取つた結納の百両印南へ帰さずばならず折角首尾よう暖まった金、帰すは残念コリヤ一思案を、ム、オ、それよ／＼」

と小うなづき、足を早めて立帰る。

おかやは影を見送つて、済まぬやうすを汲んで出す茶碗片手に

「こちの人、そんならどうでも七太夫様へ養子の変改を」

「オイノ弟は段々入り訳を語り断り云ふし、又あなたへ申せばいい今の通りぢや、というてコレ所詮弟は得心せぬやうす。おれが愚鈍から引き出したこの難儀、嬢ア、ひよような事になつたはいの」

と夫が悔やみに、女房も暫し途方にくれるが、気を取り直し、

「何のマアそのやうに案じる事はござんせぬ和助様じやて、兄の難儀になる事ぢやと聞かしやんしたら余所に見てはみやしやるまい。戻らんしたら又よいように談合にもなるぞいな。こんな時には酒でも飲んで氣をしつかりと持たしやんせ、爛して来うかへ」

「イヤ、おりやもう、酒も水も咽喉を通らぬ」  
とさしうつむいたる顔形、見る目涙につつかゝる、癢を押さえて、

「モ常々から突き詰めたお前の心、あんまり義理を立て過こしてひよんな事など必ず見せて下さんすなへ。二親に死に別れ杖柱とも思つてゐるお前に、もしもがあつたらわしや何んとせう、どうならう」

と夫の膝に打伏して、歎く心ぞいじらし。心も夕陽、いつきせき立戻る菅野和助

「兄者人、芝村の右の断り仰せられしか、ハア秋の日脚も過ぎたればこれよりすぐさま船場へ出立なおかや殿、この間より段々のお世話、この上ながら兄者人への儀宜しく頼み存ずる」  
と云ひ捨て出るを、

「ア、コレ、待ってたも。さてまあ難儀なは七太夫殿ぢや。断り云ふを聞き分けず、印南の一家一門披露されたれば武士が立たぬこの事ならずは、コレマ滅相な、こちの家で腹切ると云はるるはいの、」  
「これは又けしからぬ。不承知をいか、申すは、そりやあの方の無理わがま」

「サイノ無理は無理ぢやが、雉子と鷹サことに段々と恩ある人、面当てに切腹と長いものひねくり廻して切羽、所で右の訳でも話したらさては

さうかと得心もあらうかと」

「ム、」

「云ひかけて見たれどもな、やつぱり了簡せぬはいの」  
と聞いてりびっくり、

「ナ、何とおつしやる、スリヤアノ江戸出立の入り訳を」

「サア是非のう云うたはいの」

「エ、ハツ」

とばかりに氣は転倒、兄が胸倉引つ掴み、

「チエ、こなたはのう、他言せまじき袖文の認めしと、とくとこなたにサ云うたではないか、それに大事を打明けし一味徒党の輩へ何と云訳あるべきぞ。エ、しなしたり口惜しや」

と、立ったりあたり狂氣の如く、訳は知らねど女房も傍にうろくと氣をあせる、光興、心取り直し、

「ハア、力なし、みだりに口外せしは皆某が科、うぬ一大事を知つたる七太夫住家へ駆け込み討ち放し我も切腹、さうぢや」

と駆け出すを、弥作は、裾にしがみ付き、

「弟待つてくれ、大事の事は云やさぬ、云やせぬはいの」

「ヤ何と」

「サア何ぼ俺が百姓でも、大事の事は合点してゐる。サ、云やせぬ、これ氣を静めたもマ、下にあや、ハテマ下にゐやいの、ガ今のやうに云うたはそちが心を引いて見たのぢや。オ、それ程までに魂を据多たらば敵、サア堅い奉公任損じもあるまい、オ、でかした、アハ、コレ和助たつた一つ兄が頼みがある。常々から強欲な七太夫最前の詞の端、たつて仲人したがるはつきり先から礼物を

受ける心、そこで俺が思ふにはこつちも又断り代さへ見せたらばこりや納まりそんな事、が何をいうても水呑み百姓、云ひにくいけれどそなた少々持ち合はせがあらば、何と兄に貸してたもらぬか」

と余儀なき詞、顔色を見やる目に浮く露の玉

「兄者人、お詞を背くといひ段々御苦勞かけまするはい、なる程彼は村役人殊にあなたの恩ある者やお心に足らずとも。拙者これに金五両配分の用金なれども、これにて無事に納まるやう」

「イエ、申し長道中の入用金、これがうては和助様の」

「ア、イヤ、道連れもござれば、その儀は又いかようともなりませう」

「ア、騒動ぢや、アレ暮六ツ鳴つて来た鳴つて来た、サ弟早う行つてくれ、アソレ嬢浜の治郎作が所で下りの便船頼んでやりや、われも浜まで送つてやれ」

「サ行けなら行くが、返事が遅いと、又、七太夫様が」

「サア多いはい、来たらどうなとやつつけるは。われが傍にゐると向こうは侍、人前作つて得心せぬは。ヨ、氣遣ひせずと送つてやりや。サ弟早う行け。ア、嬢送つてやれ、弟早う行てくれ」

「そんなら船場まで見送りませう」

「ヤこれは御苦勞、しからば兄者人、いよ、かの一儀仰せられぬに相違、ざらぬな」

「オ、云やせぬ、ハテサテ今のはほんの氣を引いて見る謀事をやったのぢや。へ、俺の侍の、フン兄ぢやはい」

と立派に云うて見送る兄、出で行く弟は武士の引くは返さぬ梓弓、矢猛心の残れども是非なくおかやと引添うて、船場をさして出て行く。

間もあらず七太夫、鉢巻襷身軽の立ち、手槍かひ込み、と通り、

「ヤア弥作、あまり返答延引ゆゑ身構へして参つたり。不承知ならば和助を出せ。この手槍にて胸腹突き抜き討ち果す。何と」

と氣をせいたり。

弥作とかうの答へなく、しほ、立つて以前の白台金の包みと共に差出し、

「旦那様、あなた様へ対してはモ一言の詞も出ませぬが、マア何かさしは置いてこの進物お返し申します。代り、失礼ながら金五両お断りの印と申し、弟めはたった今」

「ナニスリヤもう出立したか」

「ハイ留めてもとまらず、氣をせいて」

「ヤ、ヤア」

と表へ駆け出て内に入り、我慢の眼血走つて弥作が鬚引つ掴み、

「ヤいあれ程まで詞詰め致したに、某にも知らせず弟を出立させ僅かの目腐り金を突き付け、事を納めんと計るこな、横道者め、コリヤ印南より某へ送りし百両、イサヤ身が武士が立たうかと踏みつ叩いつ引きずり廻し、

「エ、こゝな恩知らずの土ほぜりめが、ウ又先つだて米進に詰め水牢にくたばる所を助けたるその大恩ある某が武士道を、よくも捨てさせたな。この上は大勢追手をかけ、引捕へて和助めを討ち放す」

と駆け出でるを、縋り留め、

「サア、お腹立ちは御尤でござります、御尤でござりますがどうぞお情には私をつた、にも切り刻み、弟は許してやって下さりませ」

「ヤア黙らおう。うぬがやうな奴千人切つたとて刀穢しだ。よいは

わが詞を背きし返報、最前聞いたる四十余人の者、上野を討たんず企み、この上は京都の西八条、薬師寺殿の下屋敷へ早馬にて駆け付け、一部始終を注進して褒美の銀を、アイヤこの鬱憤を晴らさんと、腰に取り付き身をふるはせ

「マア、待って下さりませ」

「エ、放せ」

「待って」

「放せ」

「待って、お待ちなされて下さりませ」

「それを注進」しられましては、弟ばかりぢやござりませぬ、四十余人の衆が大望の妨げ。どうぞ御了簡を」

「ヤア邪魔ひろぐな」

と蹴飛ばし、欲に眼も暗紛れ、逸足出して駆け行く弥作今は絶対絶命、傍なる鉄砲追取つて手早に込めたる玉薬火繩片手に表の方、畦道を行く七太夫が背骨へどうと打ち込めば、ふすぼり返つて死してけり

「ハア、もう叶はぬ」。所の役人殺したれば所詮生きてはゐられぬ体、申し七太夫様堪忍しておくれなまりませ。女夫が受けた恩も送らず、仇も返すも因果づく、ともに死ぬるが云訳」

「エ、コレマ立派に腹切らうと思つても、ア、刃物の光で気が遅れる。南無阿弥陀仏、オ、さうぢや百姓に似合った草刈鎌、腹へ突き立てひと思ひ」

あてども闇に打ち込む鎌、

「アツ」

とばかりに目もくらみ手足をもがき七転八倒、のたうち廻る苦しみを、

知らぬおかやは息せきと、

「オ、マアこの暗いのに火も灯さず、何してゐさんす佐助殿」

と探り寄つたる夫の傍、手先にさはる鎌の刃先、血汐のしたより、

「ヤア、こりやお前腹切つてかハアハツ」

と魂消るおかやが声、提灯照らし萱野和助、門口ずっと

「ヤア兄者人御生害か、こは、いかに」

と駆け寄つて、二人が介抱、苦痛の弥作

「オ、弟戻つたか、ア、ハア術ない」

「ア、コレのるまい、ソレおかや殿しつかりと押さへてゐめされ。

まず明しを行灯へ」

手早に暖簾引き切つて、ぐつと締めたる即座の腹帯

「申し、兄者人、和助でござります。お心確かに、ガ何ゆえにこの自害、やうすは何と」

「オ、やうすと云うたら、ア、面目ない、ガ一通り聞いてくれ、最前大望の話云はぬと云うたはそちをなだめし偽り、のつびきならぬ手詰めになり、江戸出立の一大事七太夫へ物語り、武士と武士との意気地了簡もあらうかと思ひのほかの強欲者、その一大事を注進して褒美にすると馳け出す止めても止まらず是非なくも、鉄砲にてたつたと撃ち」

「ム、さてこそ、船場にて胸騒ぎ、合点ゆかずと馳せ戻る途中にて鉄砲受けたる武士の死骸、スリヤコなたが撃ちとめて」

「オ、役人を殺した弥作、追付け召し捕りに来るは知れたこと、こゝにゐればともに難儀、サア一時も早う出立してくれ、早う」

「ぢやと申してこの体を見捨ては」

